

尾道市内遺跡

—尾道遺跡ほか埋蔵文化財調査概要—

平成29年度

平成31年3月

尾道市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成29年度に国庫補助金を受けて尾道市教育委員会が実施した「尾道市内遺跡発掘調査等事業」の概要報告書である。
- 2 市内遺跡発掘調査等事業の実施体制は以下の通りである。
事業主体 広島県尾道市　　代表者 尾道市長 平谷 拓宏

事業実施体制（平成29年度）

尾道市教育委員会教育長	佐藤 昌弘
尾道市企画財政部長	戸成 宏三

文化振興課

課長	向山 成明
課長補佐兼文化財係長	村上 幸弘
文化財係専門員（学芸員）	宇根元 了
文化財係主任	力石 智
文化財係主任（主事兼学芸員）	西井 亨（経費執行事務・調査担当）
文化財係主事	田邊 裕志
尾道遺跡発掘調査研究所学芸員	卜部 大嗣（調査担当）
尾道遺跡発掘調査研究所指導員	村上和香奈（調査担当）

<出土遺物等整理作業員> 高垣 美代

- 3 本書の執筆は、西井が担当し、尾道市教育委員会において編集した。
- 4 檜出遺構の実測および写真撮影は、西井が担当した。
- 5 出土遺物の整理は、高垣が担当した。
- 6 出土遺物の実測・写真撮影、挿図の整図は、西井、高垣が担当した。
- 7 尾道市内遺跡出土木製品及び金属製品の保存処理を懐吉田生物研究所に委託した。
- 8 本書における用語「発掘調査」・「確認調査」・「試掘調査」の定義、埋蔵文化財として取扱う遺跡の時代範囲は、平成12年3月29日付け中国四国ブロック文化行政主管課長会議作成、翌日より適用の「開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに係る判断基準」に基づく。
- 9 本書で使用する検出遺構標示記号および土師質土器・瓦質土器の器種分類記号は、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所（現・広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所）で行われているものに準拠する。
- 10 調査区土層断面図で記す土層の色調は、『新版標準土色帖 2002年版』によった。
- 11 挿図および図版における出土遺物番号は、同一である。
- 12 挿図中に方位を記入するものの北方位は、すべて磁北である。
- 13 本書で使用する地図は、尾道市作成によるものである。
- 14 調査によって得られた資料は、尾道市教育委員会で保管している。

目 次

I	はじめに	1
II	尾道遺跡調査概要	
1	遺跡の範囲と調査区割	2
2	既往の調査	3
3	調査概要	
(1)	第206次調査 (JHO2地点)	4
III	市内遺跡出土遺物保存処理事業概要.....	6
附編	尾道市内遺跡出土遺物調査報告 (11)	7

挿 図 目 次

第1図 常称寺境内図	4
第2図 常称寺絵図.....	4
第3図 常称寺墓処門確認調査出土遺物実測図.....	5
第4図 浄土寺境内図.....	5
附編	
第1図 尾道遺跡内中世瓦出土地点位置図.....	7
第2図 尾道遺跡出土中世瓦①.....	9
第3図 尾道遺跡出土中世瓦②.....	10
第4図 尾道遺跡出土中世瓦③.....	12
第5図 尾道遺跡出土中世瓦④.....	13
第6図 尾道遺跡出土中世瓦④.....	14
第7図 浄土寺建造物保存修理工事抽出瓦①.....	16
第8図 浄土寺建造物保存修理工事抽出瓦②.....	17
第9図 浄土寺建造物保存修理工事抽出瓦③.....	18
第10図 尾道遺跡調査地点位置図.....	25

挿 表 目 次

表1 尾道遺跡内中世瓦一覧表	21
表2 尾道遺跡既調査地点一覧表.....	23

図版目次

- 図版 1 - a 常称寺墓専門区画石、礎石検出
- b 常称寺墓専門区画石断面
- c 常称寺墓専門区画石検出
- 図版 2 - a 常称寺墓専門トレンチ土層断面
- b 常称寺墓専門トレンチ土層断面
- c 净土寺境内燈籠基礎検出
- 図版 3 尾道遺跡出土中世瓦
- 図版 4 尾道遺跡出土中世瓦
- 図版 5 尾道遺跡出土中世瓦
- 図版 6 净土寺建造物保存修理工事抽出瓦
- 図版 7 净土寺建造物保存修理工事抽出瓦

尾道市内遺跡

—尾道遺跡ほか埋蔵文化財調査概要—

平成29年度

I はじめに

平成29年度、「国宝重要文化財等保存整備費補助金」を受けて尾道市教育委員会が実施した「尾道市内遺跡発掘調査等事業」の概要を報告する。

事業の目的

本事業の主たる目的は、本市市街地中心部の東御所町から尾崎本町に至る一帯に所在する「尾道遺跡」内において行われる個人住宅建設工事などの「土木工事等」に対応して発掘調査・確認調査を実施し、遺跡を記録保存することにある。その結果得られる資料を基として、遺跡の解明を図る。

また、市内の埋蔵文化財保護を目的として、次の諸調査を必要に応じて実施する。

○分布調査。

○開発事業計画に伴う埋蔵文化財包蔵地の有無や概要を確認するための試掘調査・確認調査。

○住宅建設工事など個人の「土木工事等」によって影響を受ける埋蔵文化財を記録保存するための発掘調査。

事業の内容

本年度実施した事業の内容は、次のとおりである。

尾道遺跡の確認調査を実施した。

尾道遺跡の工事立会を実施した。

尾道遺跡出土木製品の保存処理を実施した。

事業経費

総事業費 2,067千円 (国庫補助 1,000千円)

II 尾道遺跡調査概要

1 遺跡の範囲と調査区割

遺跡の範囲

周知の埋蔵文化財包蔵地である「尾道遺跡」は、嘉応元（1169）年、後白河院領大田庄（現・広島県世羅郡一帯）の倉敷地に公認されて⁽¹⁾誕生した中世港湾都市「尾道」を対象とする遺跡であり、本州瀬戸内沿岸部のほぼ中央に位置する広島県尾道市の市街地中心部、東御所町から尾崎本町に至る一帯の地下約1～4mに包蔵される。市街地中心部ほぼ全域に相当する約37.3haを遺跡の範囲として推定している。

街区表示による遺跡の範囲は、次のとおりである。

東御所町、土堂一・二丁目、十四日元町、久保一・二・三丁目、尾崎本町、
東・西久保町、長江一・二丁目、東・西土堂町、防地町 一帯。

調査区割

『紙本著色尾道絵屏風⁽²⁾』など古絵図に描かれた「尾道」の町割と現「尾道」の町割との対比によって、近世以前に形成された町割が現代に踏襲されてきている可能性が高いと推測されることから、街区表示・住居表示に準拠して調査区割を行っている⁽³⁾。

遺跡名標示記号：9 LOM * 遺跡名標示記号は、広島県尾道市立町遺跡調査研究所（現・広島県立尾道博物館）ハリ町（遺跡研究室）で行なっているものに準拠する。

第一 目				第二 目		調査 次数
A 東 御 所 町	F 久保二丁目	K 長江一丁目		A～Z 第一目各町内における 街区を基とした区割。 共有地・寺社域など街 区を越えて広がるもの は別途区割する。	a 本通り	0 1～ 各区域内 における 調査次数
B 土堂一丁目	G 久保三丁目	L 長江二丁目				
C 土堂二丁目	H 尾 崎 本 町	M 東 土 堂 町				
D 十四日元町	I 東 久 保 町	N 西 土 堂 町				
E 久保一丁目	J 西 久 保 町		土堂から久保までの本通りで複数区にまたがる場合			
QA 防地町						
Z			調査の結果、埋蔵文化財包蔵地ではないと確定される地点			

註

- (1)「嘉応元年11月23日後白河院下文」、『宝簡集』巻第一、高野山金剛峯寺蔵。
- (2) 安永3(1774)年、浄土寺蔵、尾道市重要文化財。
- (3) 調査区割図は、次の報告書に掲載している。
『尾道遺跡－市街地発掘調査－1984』。『尾道遺跡－市街地発掘調査概要－1990』。

2 既往の調査

尾道遺跡は、故土屋隆氏らの尽力によって発見され、昭和50年、広島相互銀行尾道支店改築工事の事前調査として初めて学術的発掘調査が実施された⁽¹⁾。室町時代以降の遺構面および遺物包含層が幾重にも重なって包蔵されていることが確認され、また、元朝景徳鎮枢府窯製白磁碗完形品の出土もあって、この第1次調査は、昭和52年度からの国庫補助金・県費補助金を受けた継続的な発掘調査実施の契機となるとともに、『高野山文書』『淨土寺文書』などの文献史料上に記された中世「尾道」の繁栄ぶりが考古資料によって裏付けられていく端緒となった。

尾道市教育委員会の埋蔵文化財調査体制が整った昭和56年度からは、建設関係業者などに対して本遺跡の推定範囲ならびに遺跡内において「土木工事等」を行う際には事前に届出が必要であることをより周知徹底し、市教育委員会の手で個人専用住宅・店舗兼用住宅建設工事に伴う事前調査を実施しており、公共土木工事や民間事業所・法人の土木工事に伴い事業者より委託を受けて随時実施したものと合わせると、調査次数は200次を超えたが、商業都市特有の奥行きに比べて間口が極端に狭い敷地における調査は、必然的に調査区配置と調査面積に制約を伴い、一調査地点あたりの調査面積が10m²に満たないことがほとんどであるため、約37.3haと推定されてきた遺跡面積に対して約1%の面積しか調査できていないのが現状である。

こうした状況の中で集積した200次余の調査による資料は、遺跡解明の重要な手がかりとなつておらず、例えば、第34次調査地点⁽²⁾（1985年度、C D 0 3）などで海岸に関わるものと推定される遺構が検出され、第84次調査地点（1990年度、E D 0 1）などで海成層・埋め立て層が認められたことにより、おぼろげながら中世「尾道」の海岸線をつかめるようになった⁽³⁾。また、第100次調査地点（1992年度、B G 0 2）、第182・184次調査地点（2002・2003年度）など「本通り」（近世山陽道「西国街道」）に関する調査地点、第132次調査地点（1995年度、I F 0 9）など「防地口」（淨土寺山・西国寺山間の谷口）域における調査地点で検出された遺構や土師質土器を中心とする出土遺物の年代などからは、中世、防地川河口域にまず町が成立し、漸次西側に町が拡大していったことが明らかになりつつある。

遺構が存在する範囲およびその内部の全容解明のためには、さらなる調査資料の集積が必要であることから、住宅建設など土木工事対応の事前調査によって得られる「点」としての調査成果をつなぎ合わせることにより遺跡の解明を進めている。

註

- (1) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『尾道中世遺跡発掘調査概報—尾道市土堂一丁目所在一』、尾道中世遺跡発掘調査団、1977年。
- (2) 以下、既往の各調査地点の成果については、当教育委員会が各年度ごとに発行している『尾道遺跡－市街地発掘調査概要一』などを参照されたい。
- (3) 『尾道遺跡－市街地発掘調査概要一1996』挿図「中世尾道の海岸線推定図」。

3 調査概要

第206次調査（確認調査 J H O 2 地点）

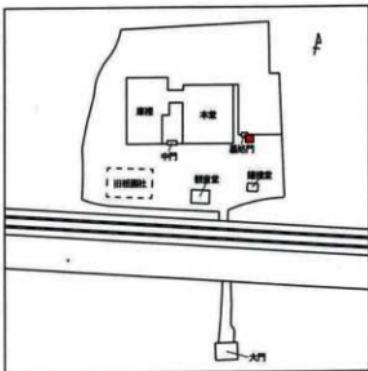
所在 地：尾道市西久保町8-3

調査原因：常称寺建造物保存修理工事に伴う埋蔵文化財確認調査

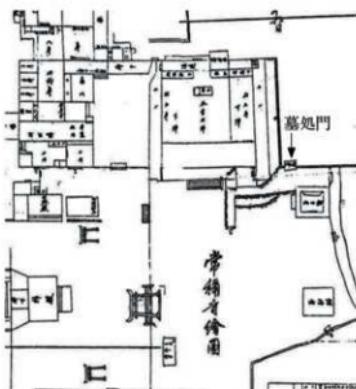
調査期間：平成29年5月16～19日、29日、6月1日

調査深度：0.6m

調査概要：重要文化財常称寺本堂他2棟保存修理事業に伴い、地下遺構の有無と墓処門周辺の構造を確認するための調査を実施した。



第1図 常称寺境内図



第2図 常称寺繪図（宝曆）

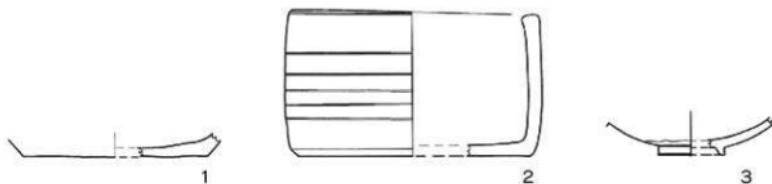
（1）墓処門（図版1）

当該地は、尾道遺跡内の常称寺本堂東側の墓処門に位置する。墓処門解体修理工事に伴い、埋蔵文化財の状況を確認する必要が生じたため、確認調査を実施した。

地下約10cmの深さで、墓処門基礎石等を確認した。遺構を確認し、保存のため埋戻しを行った。

（2）出土遺物（第3図）

墓処門の確認調査で出土した遺物で図化できたのは3点である。1は土師質器皿で推定底径は12cmである。2は備前焼鉢で、口径16.5cmと小型で、若干内傾している。3は国産の白磁皿である。



第3図 常称寺墓門確認調査出土遺物実測図 (S=1/3)

浄土寺境内工事立会（図版1，2）

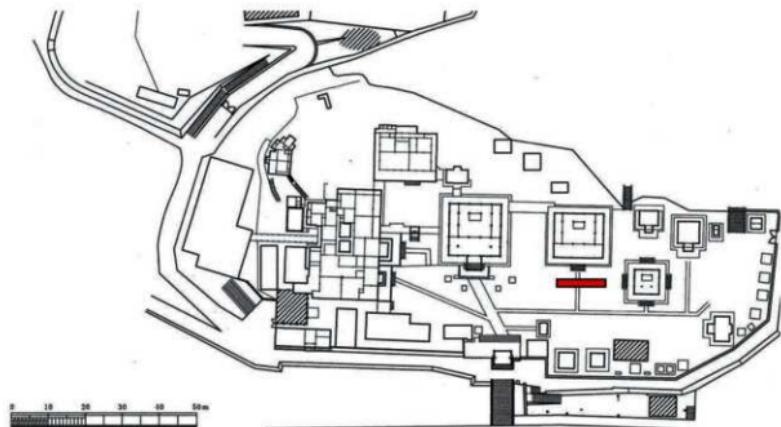
所 在 地：尾道市東久保町20-28

調査原因：浄土寺ライトアップ設備設置事業に伴う工事立会

調査期間：平成30年3月22～23日

調査深度：0.6m

調査概要：当該地は、尾道遺跡内の浄土寺境内地、多宝塔南側に位置する。浄土寺ライトアップ設備設置事業に伴い、埋蔵文化財の有無を確認する必要が生じたため、工事立会を実施した。遺構面や遺物は検出されず、近代の燈籠基礎が確認された。



第4図 浄土寺境内図

III 市内遺跡出土遺物保存処理事業概要

1 事業の目的

発掘調査における出土品は、文化財として適切に保管し、普及・公開して積極的に活用する必要がある。尾道市において、過去30年間の発掘調査による出土遺物の中で、将来、博物館等で展示可能なもの及び緊急的な保存処理が必要な木製品・金属製品について、保存・修復処理を行い、展示・公開することにより、埋蔵文化財の活用を図る。

2 事業の内容

平成30年度の保存処理対象遺物は、尾道遺跡出土の漆椀1点、曲物2点、鳥帽子片1点、漆皿1点の合計5点である。これらの遺物を櫛吉田生物研究所に業務委託し、科学的な保存処理を実施した。



写真1 漆椀

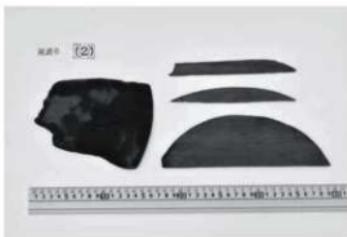


写真2 曲物底板など



写真3 曲物



写真4 鳥帽子片

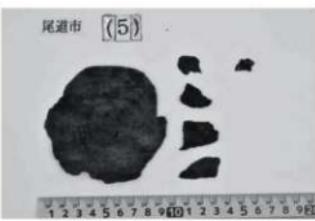


写真5 漆皿

附編 尾道市内遺跡出土遺物調査報告（11）

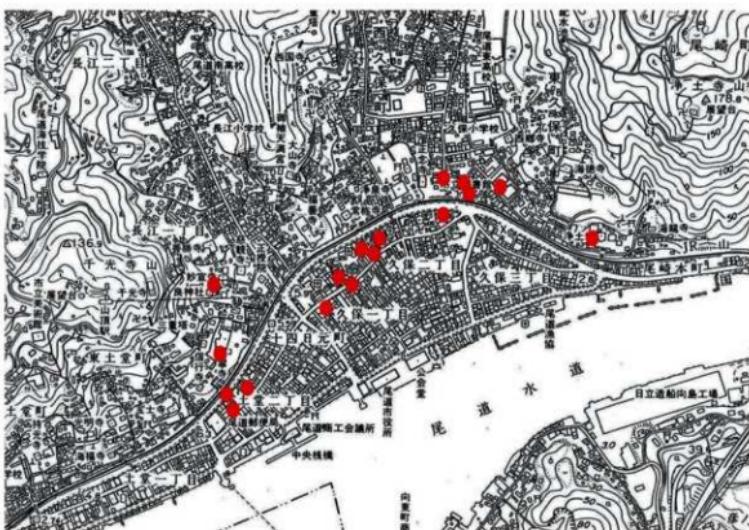
—尾道遺跡における中世瓦の研究 I —

1. はじめに

尾道遺跡内において、中世に遡る瓦が数多く出土している。また、同遺跡範囲内には、中世寺院も多く点在している。ここでは、尾道遺跡内の中世瓦を概観し、状況を把握することとしたい。

2. 尾道遺跡出土の中世瓦

尾道遺跡からは、数多くの瓦が出土している。山麓や斜面地の寺院境内の調査または町屋部分の調査でも包含層から出土しており、軒丸瓦、軒平瓦も豊富である。ここでは、地点別に出土瓦の概要について報告する。



第1図 尾道遺跡内中世瓦出土地点位置図

軒丸瓦、軒平瓦の出土状況は表1のとおりである。遺構名、層位名は、各地点の報告書に従っている。また、年代については、山崎信二氏の編年（山崎 2000）を基にしている。

1は連珠文の軒平瓦で、区画が明瞭である。全体的にぶい黄橙色で、内部は黒褐色となっており、やや焼成不良である。瓦当面は頬貼り付けで成形されている。平部には、布目痕が確認できる。2は、軒丸瓦で、外縁部幅は1.4cm、小粒の珠文と右巻三巴文が施文される。

3～6は、左巻三巴文と珠文の間に圓線をもつ軒丸瓦で、灰色の胎土で、粒子が粗い印象をうける。7は左巻三巴文、珠文との間に圓線があり、全体的に赤化しており、火を受けている。8も同様に火を受けており、右巻三巴文である。9は、右巻三巴文で、丸部凹面には、布目痕と斜め方向に糸痕、ヘラ削りによる面取りが施される。10は、右巻三巴文で、珠文、圓線とともに明瞭である。11は左巻三巴文が施文され、黄白色の表面と胎土は暗灰色である。12も左巻三巴文で、丸部凹面には布目痕が残る。13は右巻三巴文で、丸部凹面には斜め方向の糸切痕が残る。14は左巻三巴文で、珠文、圓線とともに明瞭に施文されている。瓦当面縁辺及び頸部下縁に面取りが施されている。15も左巻三巴文である。

17は、蓮華唐草文の軒平瓦で、上部に珠文と間に圓線が施される。左端は唐草文や珠文が途中で切られている。頸部後縁には面取りが施され、瓦当部は貼り付けで成形される。18は、蓮華唐草文で、左端まで唐草文と珠文が残される。瓦当部貼り付けで、頸部後縁は面取りされる。19は、蓮華唐草文の軒平瓦で、両端の唐草文が切られている。頸部後縁は面取りされている。20は、蓮華唐草文で、19と同様に両端の唐草文が切られている。平部凹面には、凸帯が貼り付けられ、瓦止めとしている。頸部後縁は大きく面取りされている。21は、宝珠唐草文で、上部に珠文と圓線が施される。頸部貼り付けで成形されている。22は、菊水唐草文の軒平瓦で、珠文ではなく、上下に圓線が施文される。瓦当部貼り付けで成形されている。23は、蓮華唐草文だが、蓮華中心部が縮小した形で、珠文ではなく、上下に圓線が施される。頸部後縁に面取りはない。瓦当部貼り付けで成形されており、成形や胎土、色調から考えて、22と類似している。25は宝珠唐草文で、珠文や圓線はない。頸部後縁が面取りされる。26は宝珠唐草文で、上部に圓線が施文される。頸部後縁は面取りされる。

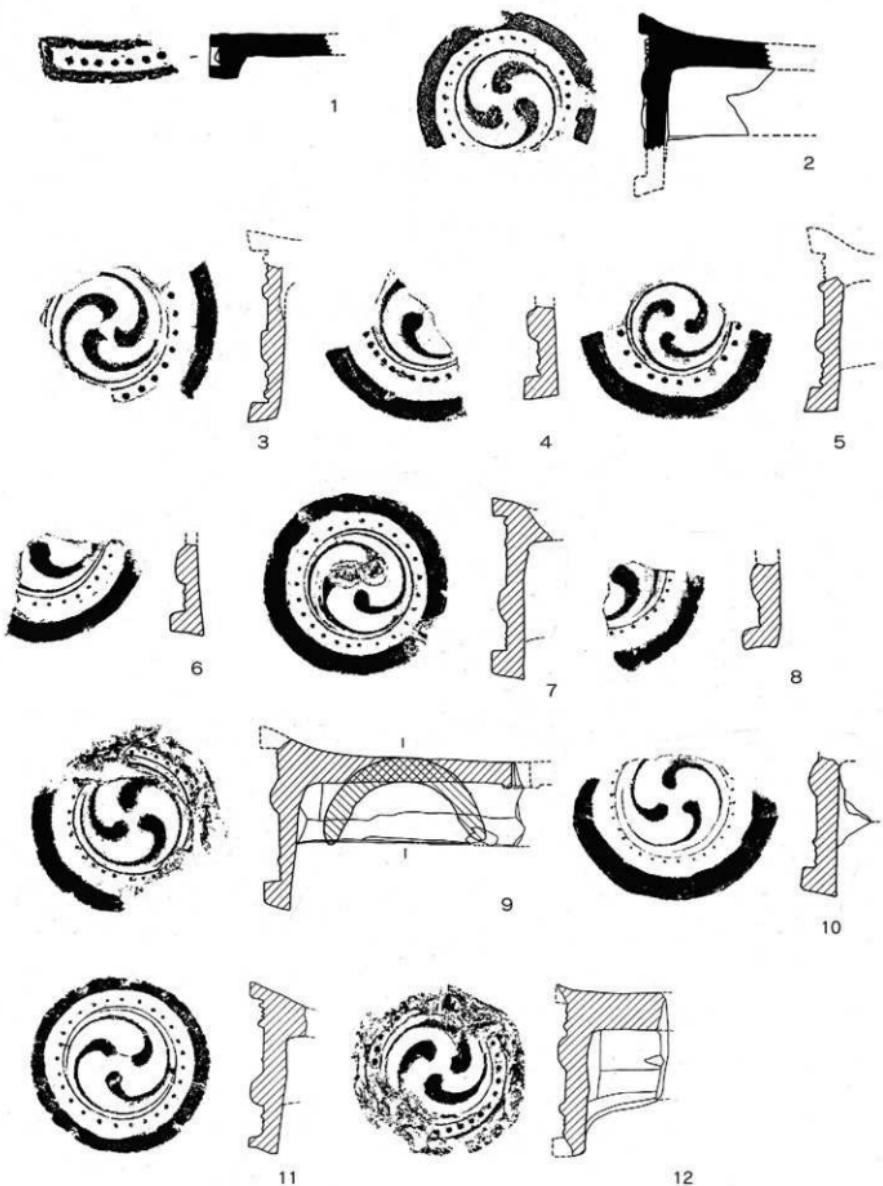
27は左巻三巴文の軒丸瓦で、珠文が小粒である。外縁部幅は1.2cmである。28は左巻三巴文の軒丸瓦で、珠文は大きく圓線は認められず、三巴の尻尾先端が圓線化している。三巴頭部分は緩やかに細くなっている。28は、左巻三巴文の軒丸瓦で、こちらには大型の珠文との間に圓線が施文されている。胎土は灰白色である。30、31は、連珠文の軒平瓦で、上下に圓線あるいは区画線が施文される。頸部貼り付けで成形されている。32は鬼瓦の一部である。

33は、唐草文の軒平瓦で、上部に珠文と圓線が施文される。頸部の前後縁が面取りされている。頸部の貼り付けにより成形されている。34は左巻三巴文の軒丸瓦で、径1.2cmの珠文が配され、圓線はない。外縁部幅は2.4cmと広く、全体の径も16.8cmと大型である。35は左巻三巴文の軒丸瓦で、19の珠文が配され、三巴文の尻尾部分が圓線化している。外縁部幅は2.0cmで、外縁前後が面取りされている。36は、左巻三巴文の軒丸瓦で、小粒の珠文と圓線が施文される。外縁幅が、1.6cmである。

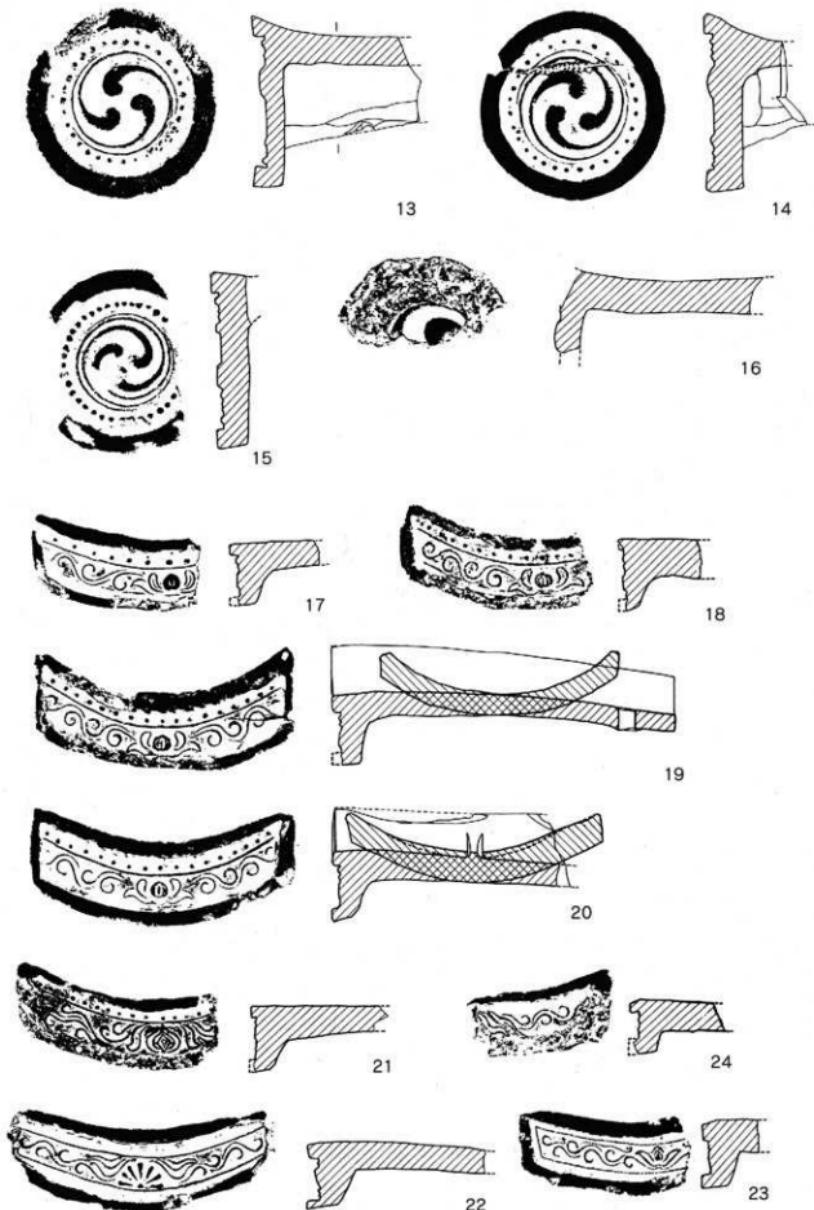
37は、右巻三巴文の軒丸瓦で、尻尾が非常に長く、先端部が細い。珠文は小粒で、外縁部幅は1.8～3.7cmと非常に偏りがある。丸部と瓦当部の角度があることから、雁振瓦の可能性がある。38は、菊水唐草文の軒平瓦で、上下に圓線が確認できる。非常に熱を受けており、胎土等は不明である。

40は、左巻三巴文の軒丸瓦で、珠文と圓線が施文される。外縁部幅は1.6cmで、前縁には面取りが施されている。41は、右巻三巴文の軒丸瓦で、珠文のみで圓線は施文されていない。丸部凹面には布目痕が確認できる。42は、左巻三巴文の軒丸瓦で、珠文と圓線が施文される。他に比べて小型で、直径10.8cmである。

43は、連珠文の軒平瓦で、区画線も施文される。瓦当部は頸部貼り付けで成形されている。44も連珠文の軒平瓦で、区画線も施文される。同様に頸部貼り付けである。45は、左巻三巴文の軒丸瓦で、小粒の珠文と圓線が施文される。三巴文が高く浮き出しており、外縁の高さも高い。全体に



第2図 尾道遺跡出土中世瓦① (S=1/4)



第3図 尾道遺跡出土中世瓦② (S=1/4)

火を受けている。46は蓮華唐草文の軒平瓦で、上部に珠文と圈線が施文される。瓦当部貼り付けで成形されている。

47は、蓮華唐草文の軒平瓦で、上部に珠文、上下に圈線が施文される。唐草文と珠文は端で切れている。頸部後縁の面取りはされていない。火を受けている。48は、唐草文の軒平瓦で、中心部の飾りは不明である。これも火を受けている。上部に珠文と圈線が施文される。唐草文は巻が弱く、1本ずつ伸びている。頸部後縁は大きく面取りされている。49は、右巻三巴文の軒丸瓦で、珠文が施文されている。火を受けている。50は、左巻三巴文の軒丸瓦で、珠文が配されている。

51は、蓮華唐草文の軒平瓦で、上部に珠文、圈線が施文される。端は唐草文が切れており、型が切り詰められたものと考えられる。瓦当部貼り付けによって成形されている。52は、蓮華唐草文の軒平瓦で、上部に珠文、圈線が施文される。瓦当部貼り付けによって成形されている。53は、宝珠唐草文で、上部に珠文と圈線が施文される。左端から1.5cmの場所にわざかな斜め直線の段差が確認できる。頸部後縁が面取りされている。54は唐草文の軒平瓦で、上部に珠文と圈線が施文される。左端の唐草文が端で切れており、型の切り詰めが行われている。頸部後縁は大きく面取りされている。57は、左巻三巴文の軒丸瓦で、外縁部幅は2.2cmである。

58は、左巻三巴文の軒丸瓦で、大粒の珠文と圈線が施文される。直径11cmと小型であるが、外縁部の高さは1.5cmと高い。59も同様であり、直径10.5cmと小型である。

60は、唐草文の軒平瓦で、53と同様に直線状の段差があり、53と同型と考えられる。珠文と圈線が配されている。61は、菊水唐草文の軒平瓦である。64は、右巻三巴文の軒丸瓦で、珠文と圈線が施文される。外縁部幅は2.0cmである。三巴文の頭部のふくらみから尻尾までが滑らかに施文されている。65は、右巻三巴文の軒丸瓦で、珠文と圈線は施文されていない。66は、連続した三巴文が施文された軒平瓦で、推定6個の三巴文が配され、上部に珠文と圈線が施文されている。67は、宝珠唐草文の軒平瓦で、上部に圈線のみが施文される。25と同じ文様構成であるが、宝珠周りの葉の枚数や圈線の有無など、若干の違いがある。頸部後縁は面取りされている。瓦当部貼り付けによる成形である。68は、半截花菱文と唐草文の軒平瓦である。上下左右に二重の圈線が施文される。これは、後述するが、浄土寺本堂の瓦と同型であり、奈良県の大安寺瓦とも同型という（山崎2000）。

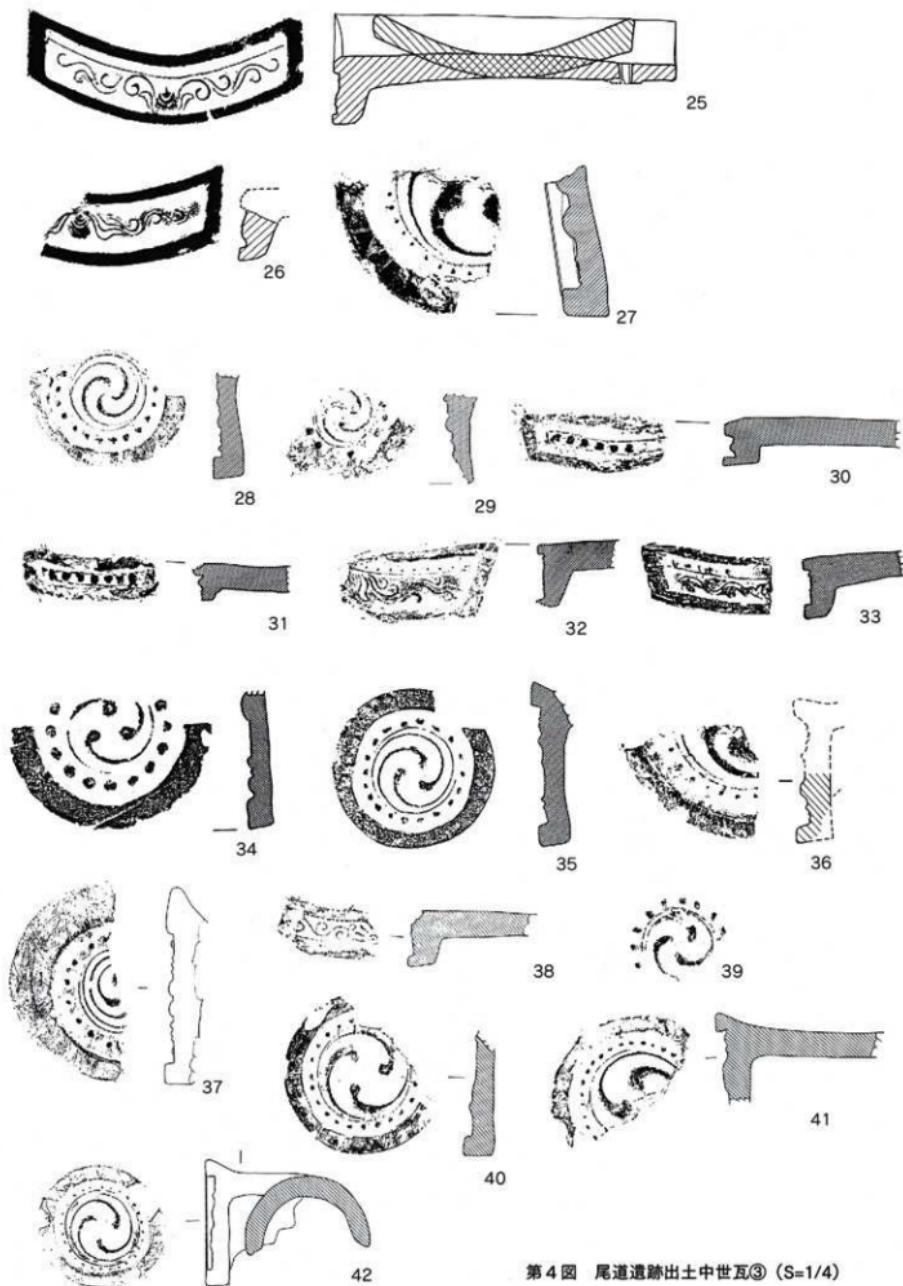
72は左巻三巴文の軒丸瓦である。珠文と圈線が施文される。

以上が、尾道遺跡の過去の調査で出土した軒丸、軒平瓦である。丸瓦や平瓦までいれると膨大な数量となるため、ここでは、年代判定が可能なものを中心に提示した。また、3~26の天寧寺出土瓦のように一括性が高いものも含まれているが、多くは包含層出土のため、その個体のみでは年代が判断できないものもある。

そこで、次にこれらを補強する資料として、平成16~25年度に実施された浄土寺建造物保存修理事業で抽出され、浄土寺から尾道市に寄贈された軒丸、軒平瓦を概観し、比較検討を行うこととした。

3. 浄土寺建造物保存修理事業抽出の中世瓦

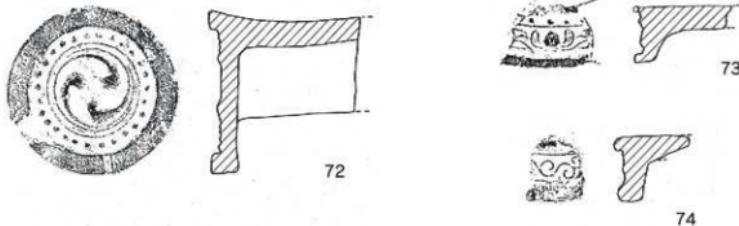
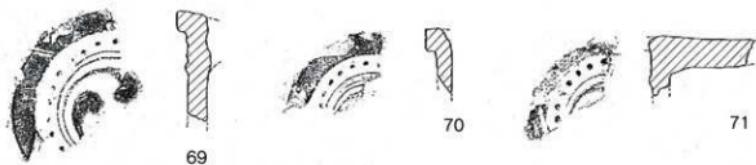
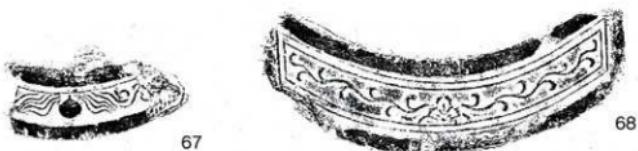
尾道遺跡範囲内には、浄土寺などの数多くの中世寺院が分布している。特に浄土寺は、西大寺の定証上人による嘉元元年（1303）から嘉元4年（1306）にかけての伽藍整備で諸堂が建立され、その後火災に見舞われるものの、嘉暦2年（1327）に本堂、嘉暦3年（1328）に多宝塔が再建されている。阿弥陀堂も貞和元年（1345）に再建され、現在に至っている。こうした14世紀初頭に遡る



第4図 尾道遺跡出土中世瓦③ (S=1/4)



第5図 尾道遺跡出土中世瓦④ (S=1/4)



第6図 尾道遺跡出土中世瓦⑤ (S=1/4)

諸堂があり、かつ江戸時代に入って方丈、庫裏客殿などが建立された際にも、前述の中世建造物の瓦が再利用されている浄土寺の中世瓦を概観し、尾道遺跡出土中世瓦と比較検討しておくこととした。

75～89は浄土寺方丈及び庫裏客殿の屋根瓦として再利用されていた中世の軒丸瓦である。全て三巴文であるが、珠文の数や巴の巻方向、成形方法等でいくつかのタイプに分類できる。

タイプAは、左巻巴文で珠文が27個のものである。丸部凹面には布目、斜め方向の糸切痕、吊り紐痕が確認できる。外縁部幅は1.6cm程度である。

タイプBは、左巻巴文で珠文が31個のものである。丸部凹面には布目、斜め方向の糸切痕、凹面を横断する瓦止めの粘土帶が確認できる。

タイプCは、左巻巴文で珠文が23個のものである。丸部凹面には吊り紐痕が確認できる。また、80は長さ26cmと小型である。

タイプDは、左巻巴文で珠文が18個のものである。長さ26cm程度と小型である。

タイプEは、左巻巴文で珠文が16個のものである。丸部凹面にはコビキBが確認できる。

タイプFは、右巻巴文で珠文が31個のものである。玉縁後縁に面取りがみられる。

タイプGは、右巻巴文で珠文が22個のものである。丸部凹面に吊り紐痕や瓦止めが確認できる。玉縁から凹面にかけて面取りされている。

90～113は浄土寺方丈及び庫裏客殿の屋根瓦として再利用されていた中世の軒平瓦である。

90は、連珠文が施文され、全体に褐色の胎土である。91は蓮華唐草文と珠文、圈線が施文される。明王院本堂の当初瓦と同じ型と考えられる。92、93は、蓮華唐草文と珠文、圈線が施文される。浄土寺多宝塔軒平瓦と同じ型と考えられる。94は、蓮華唐草文と珠文、圈線が施文される。19の天寧寺出土瓦と同じ型である。頸部後縁は面取りされている。95は、蓮華唐草文と珠文、圈線が施文される。23の天寧寺出土瓦と同じ型である。96は、蓮華唐草文と珠文、圈線が施文される。両端の唐草文が切れている。頸部後縁は面取りされている。97は、蓮華唐草文と珠文、圈線が施文される。頸部後縁は面取りされている。98は、菊水唐草文とそれを囲む圈線で構成されている。天寧寺出土の22と同じ型である。頸部後縁は面取りされている。99は、連続した三巴文と珠文、圈線が施文されている。頸部後縁は面取りされている。66と同じ型である。100は、蓮華唐草文と珠文、圈線が施文される。他の軒平瓦と比べ、珠文の数が多い。また、唐草文は3枚で、1枚分切られている。蓮華等の文様は隆起が高く、明瞭である。頸部後縁は面取りされている。101は、宝珠唐草文と圈線が施文されている。同じ文様構成として、天寧寺出土瓦26があるが、26は唐草文が切れているのに対し、101は完全な文様構成であり、同じ型の再利用と考えられる。頸部後縁は面取りされている。102、103は、宝珠唐草文と圈線が施文されている。頸部後縁は面取りされている。104は、唐草文と珠文、圈線が施文される。唐草文が両端で切れており、型の切りつめが考えられる。107、108は、桐を中心配した唐草文で、葉は2枚である。これらは、浄土寺阿弥陀堂の天正20年銘のある軒平瓦と同一と考えられる。109～113は、簡略化された蓮華を中心配した唐草文が施文される。

以上が、浄土寺建造物保存修理事業で抽出された軒丸、軒平瓦である。ここでは、代表的な瓦のみ提示しているため、全ての種類ではない。また、方丈、庫裏客殿の屋根に再利用されていた瓦であるため、年代については、他資料との比較検討が必要となる。そこで、次に尾道遺跡出土瓦を含め、比較検討を行い、大まかな編年を考えみたい。そこで基準となるのが、山崎信二による尾道周辺の編年案である。山崎氏は、尾道市及び近隣地域の中世寺院瓦を調査し、大和や京都での編年



75



76



77



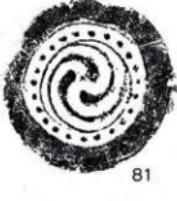
78



79



80



81



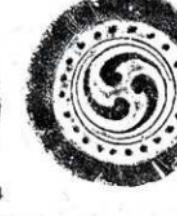
82



83



84



85



86



87

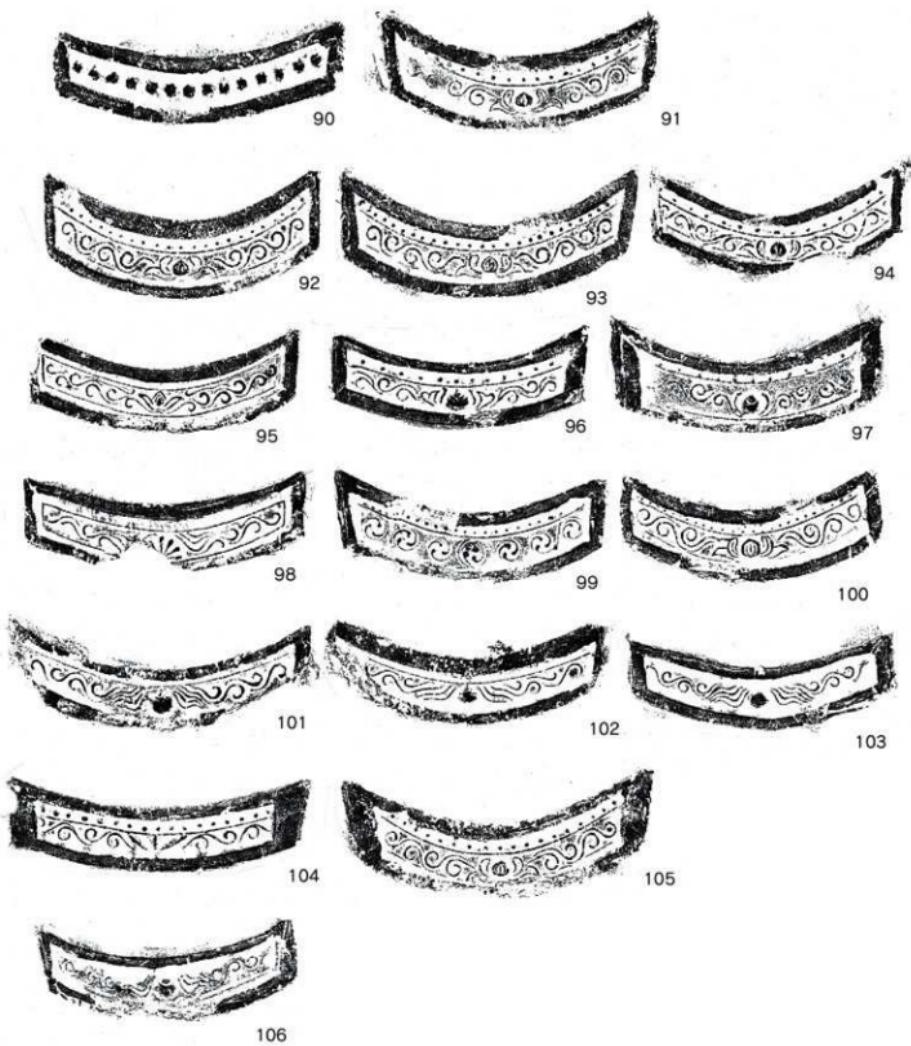


88



89

第7図　浄土寺建造物保存修理工事抽出瓦① (S=1/4)



第8図　浄土寺建造物保存修理工事抽出瓦② (S=1/4)



107



108



109



110



111



112



113

第9図　浄土寺建造物保存修理工事抽出瓦③ (S=1/4)

と比較できる形で、編年案を提示している。尾道では、中世IV期から中世VII期の瓦が示されている。尾道市内では、浄土寺本堂・阿弥陀堂・多宝塔・山門、西郷寺本堂、西國寺金堂、天寧寺出土（尾道遺跡）の瓦および福山市明王院の瓦によって構成されている。これらの瓦には、本報告の瓦との類似性、共通性が多くみられることから、山崎氏の編年をもとに、比較検討してみたい。

4. 尾道遺跡における中世瓦の編年

本報告では、過去の尾道遺跡発掘調査出土の中世瓦及び浄土寺建造物保存修理事業で抽出した中世瓦について概要を報告した。これらの瓦を山崎氏の編年にあてはめて整理してみたい。

まず、1、30、31、43、44、90は、連珠文の軒平瓦で、頸部貼り付けで成形されている。近畿地方に多くみられる中世II期の連珠文軒平瓦に相当すると考えられる。山崎氏の編年案では、尾道の中世瓦は中世IV期からとなっているが、わずかではあるがそれに遡る中世II期の瓦が確認できる。中世II期は1210年から1260までとされるが、この時期は港町尾道が大田庄倉敷地に認定されて50年程が経過している段階である。90以外の5点は、いずれも港東側、防地口周辺から出土している。これは、入り江があった場所周辺と推定され、この周辺に瓦をもつ建物（土蔵など）が存在した可能性を示唆している。ただし、この連珠文軒平瓦とセットとなる軒丸瓦が確認できていない。この時期については、もう少し類例を待つこととしたい。

確実に中世III期と考えられる瓦は確認できず、次は中世IV-2期（1320～1333年）となる。軒丸瓦では、64、84がこの時期に比定される。右巻巴文で、珠文が大きく、外縁部幅は狭い。軒平瓦では、68、91～93が該当する。68は山崎報告（山崎 2000）のP226第99図2と同范瓦と考えられる。これは、奈良県の大安寺瓦とも同范とされ、浄土寺瓦の方が古いとされている。また、頸部後縁の面取りもない。91は、山崎報告P224第98図3と同じ文様構成であり、面取りされていないことも考えると当該時期が妥当だろう。92、93はP228第100図4と同一文様構成であり、同じく面取りされていない。浄土寺多宝塔当初瓦と考えられる。

中世V-1期（1333～1350年）であるが、47が比定される。これは、P228第100図2と同范と考えられ、浄土寺阿弥陀堂の当初瓦と同一である。唐草は3枚だが、非常に文様が大ぶりで、瓦当面の高さも高い。

中世V-2期（1360～1380年）は、天寧寺出土瓦が相当する。17～19の天寧寺出土瓦と、46、51、94がこの時期に比定される。17、19は明王院本堂の范型の両端を切り詰めたものとされ、唐草文の両端が切れている。いずれも頸部後縁が面取りされるが、この面取りがこの段階からでてくるようである。尾道の中世瓦の編年において、この頸部後縁の面取りがこの時期以降の指標となる。

中世VI-1期（1380～1430年）は、23、95が相当する。中心の蓮華が簡略化され、唐草は5枚となる。珠文はなく、頸部後縁も面取りもない。

中世VI-2期（1400～1430年）は、20～22、32、38、48、61、98～100が相当する。21は蓮華の中心が菱形となるもので、上部に圓線、珠文が施文される。22は菊水唐草文、99は連続した巴文が施文され、古い文様構成ではあるが、上部に珠文があり、頸部後縁に面取りがあることから、この時期に比定した。100は、蓮華唐草文だが、唐草文が3枚で唐草の巻きが強い。48は、かなり焼けていることと文様がごく一部ではあるが、文様の唐草文は、他にない事例である。中心部は蓮華と推定され、そこから派生する葉は簡略化される。唐草は細く、巻きが小さいものが同方向で連続する。文様構成は古手だが、頸部後縁は大きく面取りされており、この段階に位置付けた。

中世VII期（1430～1490年）は、24～26、32、53、60、67、101～103、106が相当する。宝珠唐草

文が多くを占める。53、60は宝珠唐草文で、中央が菱形を呈する。21が類似例であるが、21の下部を切り詰めた文様となっており、宝珠や唐草文の下部が切れている。また、53、60に共通して、左端から1.5cmほどの場所に斜めに段差がついており、53、60はつまり、同范瓦と考えられる。そこから時代がくだと考えて、この時期に比定した。

中世Ⅷ期（16世紀）は、83、107～113である。83、107、108は浄土寺阿弥陀堂の天正20年銘瓦と同一の文様構成であり、83はコピキBである。

以上、大まかではあるが、山崎編年に沿って、報告した瓦を整理してみた。本報告では、中世瓦の概要を述べるに留めたが、他にも個人寄贈資料で、尾道の中世瓦が報告されている。それらとの比較、さらなる年代の検討、瓦生産の様相などは、次回の報告でまとめてこととしたい。

引用・参考文献

- 佐川正敏 1995『鎌倉時代の軒平瓦の編年研究—よみがえる中世の瓦』『文化財論叢II』
森 恒夫 1982「備後南部中世寺院の軒平瓦について」『尾道市文化財春秋』17
山崎信二 2000『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所第59冊
国宝浄土寺修理委員会 1973『国宝並びに重要文化財浄土寺本堂、多宝塔、山門修理工事報告書』
重要文化財西郷寺本堂及び山門修理委員会 1965『重要文化財西郷寺本堂及び山門修理工事報告書』
宗教法人浄土寺 2015『重要文化財浄土寺方丈ほか五棟並びに裏門保存修理工事報告書（本文編）』
宗教法人浄土寺 2015『重要文化財浄土寺方丈ほか五棟並びに裏門保存修理工事報告書（図版編）』

表 1 尾道遺跡内中世瓦一覧表

番号	報告書番 写真 図版	地点名	遺構名	層位	種別	文様	瓦当高	時期	備考
1	110	FF01	SK06		軒平瓦	唐珠文	3.60	II	
2	111	FF01	SK06		軒丸瓦	巴文	14.80		
3	71	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
4	72	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
5	73	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
6	74	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
7	75	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文	14.80	V・2		
8	76	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
9	77	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
10	78	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
11	79	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文	14.60	V・2		
12	80	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
13	81	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文	15.20	V・2		
14	82	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文	15.20	V・2		
15	83	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文	14.80	V・2		
16	84	M001～06	第1層	軒丸瓦	巴文			V・2	
17	85	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	5.60	V・2		
18	86	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	5.60	V・2		
19	87	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	6.00	V・2		
20	88	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	6.40	V・2		
21	89	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	5.60	VI・2		
22	90	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	6.40	VI・2		
23	91	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	5.60	VI・1		
24	92	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	5.60	VII		
25	93	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	5.60	VII		
26	94	M001～06	第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	5.60	VII		
27	8	C001		4層	軒丸瓦	巴文			
28	1	JN01			軒丸瓦	巴文			
29	2	JN01			軒丸瓦	巴文			
30	3	JN01	SX01		軒平瓦	唐珠文	4.80	II	
31	4	JN01	SX01		軒平瓦	唐珠文	3.20	II	
32	5	JN01			軒平瓦	唐珠唐草文		VI・2	
33	36	KD01	SX01		軒平瓦	空珠唐草文		VII	
34	38	KD01	SX01		軒丸瓦	巴文			
35	71	KD01	SX01		軒丸瓦	巴文	13.20		
36	52	CC01		第14層	軒丸瓦	巴文			
37	12	EA01		胆嚢	軒丸瓦	巴文			
38		EA01		胆嚢	軒平瓦	唐珠唐草文		VI・2	
39	40	ID02	SX01		軒丸瓦	巴文		VI・VII	
40	41	ID02	SX01		軒丸瓦	巴文		VI・VII	
41	42	ID02	SX01		軒丸瓦	巴文		VI・VII	
42	43	ID02	SX01		軒丸瓦	巴文		VI・VII	
43	69	IP06		B-5層	軒平瓦	唐珠文		II	
44	79	IP06	B-SX01		軒平瓦	唐珠文	4.80	II	
45	164	FC01		第1層	軒丸瓦	巴文			
46	196	FC01		第1層	軒平瓦	唐珠唐草文	6.00		
47	187	DC02		第1層	軒平瓦	唐珠唐草文		V・1	
48	188	DC02		第1層	軒平瓦	唐珠唐草文			
49	214	DC02		第1層	軒丸瓦	巴文			
50	247	CB02		第1層	軒丸瓦	巴文			
51	149	EC03	瓦瀬り上塙		軒平瓦	唐珠唐草文	5.40	V・VI	
52	150	EC03	瓦瀬り下塙		軒平瓦	唐珠唐草文		V・VI	
53	151	EC03	瓦瀬り上塙		軒平瓦	唐珠唐草文	4.80	V・VI	
54	152	EC03	瓦瀬り下塙		軒平瓦	唐珠唐草文		VI・2	
55	153	EC03	瓦瀬り上塙		軒平瓦	唐珠唐草文		V・VI	
56	154	EC03	瓦瀬り下塙		軒平瓦	唐珠唐草文		V・VI	
57	155	EC03	瓦瀬り上塙		軒丸瓦	唐珠唐草文		V・VI	
58	67	IP09		第4層	軒丸瓦	巴文	12.80		
59	114	IP09		第5～7層	軒丸瓦	巴文			
60	40	ED05B			軒平瓦	空珠唐草文		VI・2	
61	41	ED05B			軒平瓦	唐珠唐草文		VI・2	
62	42	ED05B			軒丸瓦	巴文			
63	43	ED05B			軒丸瓦	巴文			
64	5	IT04			軒丸瓦	巴文			
65	6	IT04			軒丸瓦	巴文	12.80		
66	7	IT04			軒平瓦	唐珠唐草文		VII	
67	8	IT04			軒平瓦	空珠唐草文	6.00	VII	
68	9	IT04			軒平瓦	空麻花型唐草文	7.60	V・1	
69	267	Ea01		1層	軒丸瓦	巴文			
70	268	Ea01		1層	軒丸瓦	巴文			
71	269	Ea02		1層	軒丸瓦	巴文			
72	270	Ea02		2層	軒丸瓦	巴文	13.60		
73	271	Ea01		1層	軒平瓦	唐珠唐草文		V・VI	
74	272	Ea01		1層	軒平瓦	唐珠唐草文		V・VI	
75	淨土寺方丈	埴根再利用			軒丸瓦	巴文	14.80		
76	淨土寺方丈	埴根再利用			軒丸瓦	巴文	14.80		
77	淨土寺方丈	埴根再利用			軒丸瓦	巴文	14.40		
78	淨土寺客殿	埴根再利用			軒丸瓦	巴文			
79	淨土寺方丈	埴根再利用			軒丸瓦	巴文	16.00		
80	淨土寺方丈	埴根再利用			軒丸瓦	巴文	13.20		
81	淨土寺客殿	埴根再利用			軒丸瓦	巴文	14.00		
82	淨土寺方丈	埴根再利用			軒丸瓦	巴文	14.40		

83		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	巴文	16.80		
84		净+寺多殿 墓根再利用	軒丸瓦	巴文	15.60		
85		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	巴文	15.60		
86		净+寺多殿 墓根再利用	軒丸瓦	巴文	14.00		
87		净+寺多殿 墓根再利用	軒丸瓦	巴文	15.20		
88		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	巴文	14.80		
89		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	巴文	14.00		
90		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	冲珠文	5.60	II	
91		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文	6.00	IV - 2	
92		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	素雅筋草文	6.40	V - 1	
93		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文	6.00	V - 1	
94		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文	4.80	V - 2	
95		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文	5.20	VI - 1	
96		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文	5.60	VI - 2	
97		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	素雅筋草文	6.00	VI - 2	
98		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	荀九筋草文		VI - 2	
99		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文	6.00	VI - 2	
100		净+寺多殿 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文	6.00	VI - 2	
101		净+寺方丈 墓根再利用	軒平瓦	冲珠筋草文	5.60	VII	
102		净+寺方丈 墓根再利用	軒平瓦	冲珠筋草文		VII	
103		净+寺方丈 墓根再利用	軒平瓦	冲珠筋草文		VII	
104		净+寺方丈 墓根再利用	軒平瓦	唐枝文		VII	
105		净+寺方丈 墓根再利用	軒平瓦	素雅筋草文			
106		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	冲珠筋草文			
107		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	唐枝文	5.20	VIII	
108		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	唐枝文	5.60	VIII	
109		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	唐枝文		VIII	
110		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	唐枝文	7.20	VIII	
111		净+寺方丈 墓根再利用	軒丸瓦	唐枝文	6.00	VIII	
112		净+寺方丈 墓根再利用	軒平瓦	唐枝文	5.20	VIII	
113		净+寺方丈 墓根再利用	軒平瓦	唐枝文	4.80	VIII	

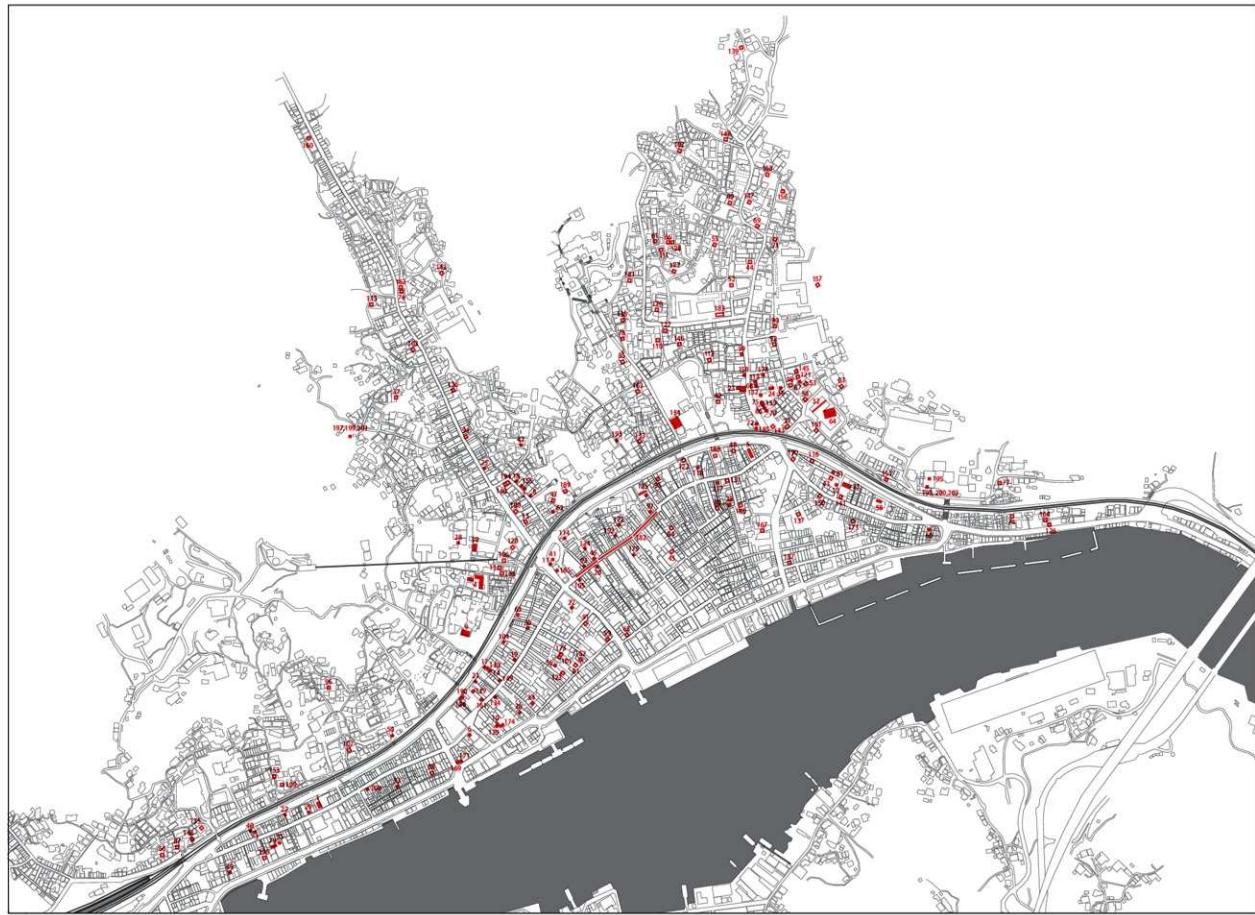
表2 尾道跡既調査地点一覧表

次 担 者	年 度	調査地 点	検出遺構	重要遺物等	次 担 者	年 度	調査地 点	検出遺構	重要遺物等
1 原 1975 BO01	柱穴、石敷、礎石 建物、土坑、石積 墓構	白磁碗、備前燒器、常滑燒 器、墨書土器、茶入など			61 1988 JBO1				
2 1977 KG01～03	礎石建物、土坑 礎石、石列	唐津燒器、白磁 器、ピット、瓦列	土師質土器、瓦質土器、輪の 足口		62 1988 KB02	土坑、木杭列	土師質土器、陶磁器、木製品		
3 1977 BB01	土坑、溝状遺構、 石組遺構			63 1988 JBO1					
4 1977 MS01～03	ピット、土坑、礎 石、理造焼、木 杭列			64 原 1988 HDO2	石組遺構、井戸跡	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器、瓦、鏡等			
5 1978 FE01～04	礎石建物、土坑 礎石、理造焼、木 杭列	墨書土器、瓦、漆碗、橫彌、 木筋など		65 1988 DC01					
6 原 1978 CG01～07	柱穴、柱穴引、常滑 焼、理造、土坑 子雀文	灘戸焼引耳器、常滑燒便、合 窓、子雀文		66 1988 JBO2					
7 1979 FI01～03	土坑、石組、理 造焼、木杭列、 柱穴、瓦列	土師質土器、瓦質土器、石御 器、瓦列		67 1988 JBO3	ピット群				
8 1980 KG04～08	礎石、柱穴、土 坑、木杭	備前燒器・木組便、人形木 製品、土師質土器など		68 1988 HF04	土坑、堆列	土師質土器、陶磁器、木製品 等			
9 1989 MQ01～06	礎石建物	軒瓦足、軒瓦瓦		69 1988 HF01					
10 1981 CF04～05	土坑、石組、ピッ ト	高麗青磁、唐津燒碗		70 1988 HF03	土坑、木杭列	土師質土器、龜山燒、瓦石			
11 1981 BO01	木杭	土師質土器		71 1988 JBO1					
12 1981 KG01	礎石、礎石	土師質土器、石御器		72 1988 JBO1	建物跡、木杭	土師質土器、瓦、漆桶			
13 1981 KG03	土坑、柱穴、土 坑、木杭	土師質土器、備前燒器 ・木組便、瓦質土器		73 1989 GC01	貼石路面、溝状遺 構、石列	土師質土器、陶磁器等			
14 1981 CC01	石組、ピット、漢 枳遺構、土坑、礎 石	唐津燒碗、伊万里燒青磁、 備前燒小壺、滑石製石鍋		74 1989 HD01					
15 1981 SAG01		馬頭狀鉢		75 1989 HF06	不明遺構、木杭 列、攸善罐	土師質土器、木製品、陶 器、鐵器、墨書土器等			
16 1982 CG01	土坑	土師質土器		76 1989 JBO1					
17 1982 CG02	石列	土師質土器、陶御器、土鍋		77 1989 HF01					
18 1982 KG09	集石、石列	土師質土器、及質土器		78 1989 JBO1					
19 1982 CC03	礎石、溝状遺構、 小穴鉢、石列、理 造焼、土坑	土師質土器、瓦質土器、木 筋、墨書土器、漆碗、 土器		79 原 1989 BJ03	集石遺構	土師質土器、瓦質土器、陶 器等			
20 1982 EI01	土坑、溝状遺構、 土師質土器、墨書土器			80 1989 FB01					
21 1983 CB01	土坑、ピット	土師質土器、石御器、唐津燒 器、石列		81 原 1989 GB03	木杭・板材よりな る溝状遺構	木杭・板材よりな る溝状遺構			
22 1983 BG02	土坑、ピット	土師質土器、陶御器、土鍋		82 1989 JBO2					
23 1983 JM01	建物、土坑、遺物 集積	土石製、滑石製石鉢、砾石、 土師質土器		83 1989 HF01					
24 1983 IF01	ピット、土坑	土師質土器、灰津、輪の羽 瓦、瓦列		84 1990 JBO1					
25 1984 SAG01	土坑	土師質土器、唐津燒、石裂瓶 ・石列		85 1990 JBO1					
26 1984 CB01	石列	土師質土器、瓦		86 1990 HF07	堆列、木杭列	土師質土器、木製品、陶 器、扇形木製品			
27 1984 MM01	土坑、土組	土師質土器、及質土器、及 質土器		87 1990 NB02					
28 1984 SAG01	土坑	土師質土器、瓦津、瓦 列		88 1990 HF01					
29 1984 BC03	井戸跡	土師質土器		89 1990 QB01					
30 1984 CC04		土師質土器		90 1990 JBO1					
31 1984 TD02		土師質土器、瓦		91 1990 DB02					
32 1984 T001		土師質土器、及質土器		92 1991 JBO1					
33 1985 BG01	木杭列	土師質土器、木筋、木製品		93 1991 EA02					
34 1985 CB03	石列、石積	土師質土器		94 1991 KV01					
35 1985 BJ02	土坑灰遺構、石組 井戸、木杭、石列	土師質土器、瓦質灰、鋼 輪、陶磁器、木製品		95 1991 FC01					
36 1986 IF02		土師質土器、陶御器		96 1991 MC01					
37 1986 SA01		土坑		97 1991 EC01	集石遺構、石列、 建物跡	土師質土器、瓦質土器、陶 器等			
38 1986 FG01	石列	土師質土器、陶御器		98 1991 IG04					
39 1986 RD02	砾堆土坑、薄 瓦敷、瓦列、石列	土師質土器、玩具		99 1992 JBO1	木杭列、土坑	土師質土器、陶磁器、木製品 等			
40 1986 RB02		捨井		100 1992 BG02	建物跡、石列、通 路状遺構	土師質土器、陶御器等			
41 原 1986 RD02	石列、土坑	土師質土器、瓦質土器、灘戸 燒		101 1992 CD04					
42 1986 KM01	ピット			102 1992 Z_01					
43 原 1987 GB02				103 1992 LB01					
44 1987 TS01				104 原 1992 CO05	石組				
45 1987 EJ01				105 1992 DO02	集石遺構、石列	土師質土器、陶御器等			
46 1987 EA01	ピット、通路、 薄瓦、石列、集石	土師質土器、青磁、瓦質土 器、灘戸燒		106 原 1992 KO02	集石遺構、石列	土師質土器、陶御器、瓦等			
47 1987 KH01				107 1992 MI01					
48 1987 FI05		土師質土器、墨書土器、瓦		108 原 1992 KA02					
49 1987 BB01	井戸跡			109 1992 NN01					
50 1987 MD01	石列			110 1992 JL02					
51 1987 BB01				111 1992 JD03					
52 1988 BB01				112 1993 JBO2					
53 1988 GD01				113 1993 HF08	石列状遺構、糠状 遺構	土師質土器、土製玩貝、土 陶御器、木製杓子、 瓦質土器等			
54 原 1988 1602				114 1993 EB01	瓦列				
55 1988 IS02				115 1993 LM01					
56 1988 ND01				116 1993 GB04					
57 1988 IF03				117 1993 FG02	集石遺構	土師質土器、陶御器、瓦器、 青銅製飾り金具、瓦、砾石等			
58 原 1988 GD01	土坑、護岸遺構	土師質土器、木製品等		118 1993 FD01	集石遺構	土師質土器、陶御器、瓦、 瓦質土器			
59 1988 DE01				119 1993 CB02	集石遺構、石列遺 構、瓦列	土師質土器、陶御器、瓦質土 器、瓦、木製品等			
60 1988 IN01	石組遺構、海岸線	土師質土器、陶磁器、土塊、 砾石等		120 1993 KB01					
				121 1993 IG05					
				122 1993 FC02					
				123 1994 CB05					
				124 1994 EB03					

次 号	員 担 者	年度	調査地点	検出遺構	重要遺物等
125		1994	EC02・03	落喰遺構群、瓦頭 り土坑、石組構状 遺構	土師質土器、陶磁器、唐津燒 甕、瓦質土器、瓦等
126		1995	JE01		
127		1995	JE01		
128		1995	JD04		
129		1995	CF06		
130		1995	CG06		
131		1995	FG03		
132		1995	IF09	板村などによる区 画か	土師質土器、滑石器、瓦、陶磁器、铁 器、金銀製飾り金盒、铁 器、すこら玉、木製品、陶 物遺存体等
133		1995	JE01		
134		1995	CF07		土師質土器、陶磁器
135		1995	ND03		
136		1996	ED01		
137		1996	GH01		
138		1996	B03		
139		1996	QH02		
140		1996	KE01		
141		1996	GB05		
142		1996	LG02		
143	原	1996	IE10		
144		1996	ND04		
145		1996	IG06		
146		1996	WD02		
147		1996	IP02		
148		1996	QA03		
149		1997	CG07	配石遺構?	土師質土器、陶磁器、瓦、滑 石質石器等
150		1997	GF01		
151		1997	IE01		
152		1998	CD06		
153		1998	NN02		
154	原	1998	IE01	石組構	
155		1998	KG10	集石遺構	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器、熟製鉢先、肥前高青磁 皿、黒釉盞等
156		1998	IE02		
157		1998	IL01		
158		1998	JN02	配石遺構	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器、瓶石等
159		1999	IF11	木軸判	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器、瓶石等
160		1999	LV01		
161		1999	CB03	集石遺構、ピット	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器、瓦器風炉等
162		2000	LG03		
163		2000	HF01		
164		2000	HE02		
165	原	2000	DB03	配石遺構、ピッ ト、石組遺構、木 杭	土師質土器、瓦器、瓦質土 器、陶磁器、円盤状土製品、 ハイゴの羽口、瓦、铁製扉・ 刀子、古錢、砾石
166		2000	KC03		
167		2000	FO01		
168		2000	HP03		
169	原	2001	CG08	石組遺構、ピッ ト、木杭	土師質土器、瓦器、瓦質土 器、陶磁器、土鍋、板金剛草 履の芯板
170		2001	GA01		
171	原	2001	CG09	石組遺構、木杭判	土師質土器、瓦器、瓦質土 器、陶磁器、木製曲物側板・ 礎板等
172		2001	EC04	建物跡、廣狀遺 構、土坑、ピット	土師質土器、瓦質土器、唐津 燒甕、陶器、陶製軸等
173		2001	GI01		
174		2001	CF08		
175		2001	CD07		
176		2001	IW01		
177		2001	TM05		
178		2001	IF12	土坑、ピット	土師質土器、瓦器、瓦質土 器、偏頭燒、網燒
179		2001	EF01	土坑、ピット	土師質土器、瓦質土器、唐津 燒甕、陶残
180		2002	FO02		
181		2002	IV01		
182	原	2002	Ea01・ Ea02	雨路状遺構、廣狀 遺構、土坑、ピッ ト	土師質土器、瓦器、陶磁器、 木製品、瓦、動物遺存体、骨 角製品
183		2003	JR02		

次 号	員 担 者	年度	調査地点	検出遺構	重要遺物等
184	原	2003	Ea03・ Da01	道路状遺構、廣狀 遺構、土坑、ピッ ト	土師質土器、瓦器、陶磁器、 木製品、瓦、動物遺存体、骨 角製品
185		2003	JA03	土坑、ピット	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器等
186		2004	CB04	土坑、ピット	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器等
187		2004	GL01		
188		2004	FT06		
189		2004	KD03		
190		2005	CB05	ピット	土師質土器
191		2006	ED02		
192		2006	EC05	廣狀遺構、土坑、 建物跡	土師質土器、瓦質土器、陶磁 器、軒丸瓦等
193		2009	JH01	柱穴	土師質土器
194		2009	KN02	性格不明遺構	陶磁器
195		2010	IT01	瓦だまり、砾石	陶磁器
196		2010	EJ04		
197		2010	KZ01		
198		2011	IT02	竈跡、長圓か裏、 慾土	陶磁器
199		2011	KZ02		
200		2012	IT03	竈跡、土坑	
201		2012	KZ03		
202		2013	IT04	慾土	陶磁器、瓦
203		2014	IT05		板碑
204		2014	FA01		
205		2015	IT06	敷石遺構	
206		2017	JH02	墓地門基礎遺構	土師質土器、陶磁器

原：原因者負担による調査地点



第10図 尾道遺跡調査地点位置図 (1:7,500)

* 数字：調査次数。赤ヌリ：遺構が存在する地点。白ヌキ：遺構が存在しない地点。

写 真 図 版



常称寺墓处門区画石、礎石検出



常称寺墓处門区画石断面



常称寺墓处門区画石検出



常称寺墓处門礎石検出



墓处門トレンチ土層断面



浄土寺境内燈籠基礎検出

図版三 尾道遺跡出土中世瓦



1



7



13



17



18



19



20



21

図版四 尾道遺跡出土中世瓦



図版五 尾道遺跡出土中世瓦



47



48



51



53



60



66



68



83

図版六　浄土寺建造物保存修理工事抽出瓦



90



91



92



93



94



96



97



98



報告書抄録

ふりがな	おのみちしないいせき							
書名	尾道市内遺跡							
副書名	尾道遺跡ほか埋蔵文化財調査概要							
巻次	平成29年度							
シリーズ名	尾道市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第51集							
編著者名	西井 亨							
編集機関	尾道市教育委員会							
所在地	〒722-8501 広島県尾道市久保一丁目15番1号 TEL (0848) 20-7492							
発行年月日	平成31年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ○○°○○'	東経 ○○°○○'	調査期間	調査面積	調査原因
尾道遺跡	尾道市久保一丁目字 本久保697-1地先～ 字中久保606-1地先	34205	一	34° 24' 40"	133° 12' 15"	20170516～ 0519、0529、 0601	2.0m ²	重要文化財常称寺 本堂他2棟保存修 理事業による
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
尾道遺跡 JHO2地点 (第206次調査)	集落跡	近世	墓処門基礎	土師質土器、陶磁器				
要約	常称寺建造物保存修理工事に伴い、墓処門の確認調査を行った。							

尾道市埋蔵文化財調査報告 第51集
尾道市内遺跡
 -尾道遺跡ほか埋蔵文化財調査概要-

平成29年度

発行日 平成31年3月31日
 編集・発行 尾道市教育委員会
 〒722-8501 広島県尾道市久保一丁目15番1号
 TEL (0848) 20-7492
 印 刷 株式会社P'Zコーポレーション

